
天界の姫君様

蓮華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天界の姫君様

【NZコード】

N3556S

【作者名】

蓮華

【あらすじ】

オリジナル作品もどき。

普通の生活をしていた主人公はいつものように朝起きると父に呼ばれリビングに呼び出される。そこで父は天界の天帝でありその父の娘である自分は天界の姫であると説明される。

その天帝の位は弟に譲つたつもりだったが、その弟が父を探して、さらに譲つたと思っていたその位は未だに父にあり、父に帰つてきてほしいと言われ仕方なく帰る事に…。普通の人間として平穏な生活をしていた主人公はこれを切つ掛けに今までの生活と百八十

度変わる事になる…。

行つた世界には妖精や魔法が存在しておりまるでファンタジー世界。主人公はこれからどうなるのか…。

プロローグ（前書き）

思いつきで書いたため、どうなるか未だに詳しいことは考えてないためどうなるかわかりません（汗）

プロローグ

夜の静寂な闇。その闇の中静かに降り注ぐ月光。

その月光は一瞬翳つた。その影は人の形をしていた。

その影は一つ。それらはゆっくりと月光に背を向けてゆっくりとある家の前に舞い降りた。

下界に降りたことでその姿が露になつた。

一人は胸の高さまである銀色の髪を流して身体はガツチリしており、紫紺の甲冑を身にまとつた男性。

その顔は世間一般で美形といつても過言はないほどの美麗でその瞳は紺。その紺色の瞳は田の前の一軒家を静かに見つめていた。

もう一人は紅い短髪を風に揺らしている。隣の人物同様その身体はがつちりとしており、身にまとつている甲冑の色は紅色の男性。こちらも美形で美麗。右手を己の頭を書きながら片田をつぶりどんか軽そうな印象を受けた。だが田の前の一軒家を片田で見つめる瞳は強かつた。

「…いくぞ」

「ああ…」

そして銀髪の青年が声をかけると短髪の青年が答えてその家に足を進める。

足を進めていく二人の田の前には玄関があり当然戸があるが、二人は気にせず足を進める。

そして、二人はそこに戸などないかのようにスッと通り抜けたのだった。

一人が廊下を足を進めていると一つの部屋に明かりがついているのを発見した。

顔を見合してひとつ頷くとそこに足を進める。

その部屋に入るとそこにはテレビがあり、その前には机そして机の前には長ソファアが一つ。
なかなかの広さがある部屋だった。

そして、ソファアの後ろにして立っているのが、一人がここに来た理由であり、探し人である。
その人物は一人を見てにっこりと笑った。

「久しぶりだね。…雷希・紅炎」

部屋の主と思わしき人物。見た目は25歳くらいで黒い短髪に黒い瞳。

その顔は田の前の二人に勝るとも劣らぬほどの美麗でやさしそうな風貌。

にこにこ笑つて突然の訪問者、雷希と紅炎を見つめていた。

「お久しぶりです…翡翠様」

スッと片膝をついて頭を垂れる一人に目の前の人。…翡翠は笑う。

「もう私は君達に頭を下げる立場ではなかつたはずなんだ

けどな……」

「いいえ。貴方様は我々が敬うべき存在。それは今も変わりません」

「……どうこう意味だい？……私の位はあの子に全て譲った」

「……確かに貴方は紫苑様に全てを渡しかの地から離れこの地球に来た。けれど、紫苑様はそれを認めていません。そして我々もそれを認めていない」

スッと真剣な顔をしていう翡翠に一人はゆっくりと顔を上げて翡翠を見た。

「……あなたはまだこの世界の王《天帝》です。紫苑様は貴方の帰るまでの留守を預かっているだけ。そう仰っています。」

「なに？」

「ですから、早く戻ってきて下さい。あなたがいなくなつてから20年。突然いなくなつた貴方を我々はずつと探ししていました。」

「まさか、こんなところにいるなんて考えもつかなかつたぜ」

主にたいして軽くいう紅炎にジロッと雷希は見るが紅炎は僅かに肩を竦めただけだった。

翡翠は一つため息をついた。

「あの子は……私が位なんていらないって言つてゐるんだから喜んで

受けければこいものを……」

「紫苑様は貴方を慕つておこります。それは貴方が一番分かっているはずでは？」

「やうだね……あの子は昔から私を慕つてくれていた」

「どこのに行くにも兄上と一緒に参りますー」と呟つてなかなか離れなかつたのをよく覚えている。

「だつたらー……だつたら紫苑様の気持ちもわかつていらっしゃると思ひます」

雷希は思わず叫ぶが相手が自分の主である事にはつとなつ言葉を紡ぐ。

「ふう……あの子の気持ちは今も変わらない……か。」

「はい」

「……仕方がない。あの子も君達も未だに私をあきらめる気はないんよつだし……わかつた。帰るよ」

「あ、ありがとひざませー！」

「あー、よかつた。これで安心してゆつくり寝れるわー」

「紅炎ーー。」

ふざけて言つ紅炎に雷希が嗜める。

「おや、どうしてだい？」

「寝めりれてもものとせず笑う紅炎に翡翠はにじにと聞く。

「それが、雷希がもひひのむくとゆつくり寝てられなにですよー」

「おやおや、それはすまないことをしていたね」

「本物ですかーーでもこれでゆつくり寝れます」

あーよかつた。と笑う紅炎ににじにこと笑う翡翠と主に対する態度を改める。と鋭い目で紅炎を睨む雷希。
ものす」と対照的だ。

「雷希、そう怒らなくとも私は構わないよ。雷希もそんな堅苦しくしなくとも普通にしゃべってくれて構わないよ?」

「駄目ですーー我々は貴方に使える身。そんな自分達が主である貴方様にそんな軽口でしゃべるなど…許されません…」

困つたよつと言つて翡翠に雷希はぎゅうとした後、やつて言つた。

「本当にお前はむかつしかり硬いな。もひちよつと肩の力を抜いてもいいだの?」

「お前は軽すきんだつーー」

そういふとあらゆる人に翡翠は苦笑をほじました。

それに気付いた雷希ははつとして頭を下げた。

「も、申し訳ござりません!」

翡翠はにこにこ笑つたまま笑う。

「いや、気にしてないよ。雷希がそんな表情をするのが珍しくてね……こちらこそ笑つてしまつてすまないね」

「とんでもござりませんつ……」

再び深く頭を下げる雷希に困つたように笑つた。

「それで、王妃と姫は今どちら?」

「二人は寝てるよ。もう遅いしね」

二人はそれにすまなさそつな顔をした。

「ああ。一人を攻めている訳じゃないんだよ。一人だつてわかつてから何も言わずに私だけ来たのだから」

「でわ、また明日の朝迎えに参ります」

「うふ。すまないね。」

雷希はジッと翡翠を見る。

「…もう消えないと下せ。」

翡翠はそれにちょっとした顔をして苦笑した。

「大丈夫。もう急にいなくなつたりしないから」

そういふと二人は翡翠に一礼をするとスッと溶けるように消えていった。

数日前の出来事

あ～平和です。私は今自然に囮まれています。

私は大きな木の下で寝転がっています。
平和です。本当に平和です。

鳥が囁り風が優しく吹き、花が咲きそして蜜を求めて蝶が飛ぶ。
これ以上の平和があるのだろうかと考えてしまふ程に平和です。

私が寝転がつてある木に目を向けると。そこにはヒラヒラと飛ぶ妖精が……そう妖精がいました。

だけど私はもうそれくらいのことでは動搖しません。ええしませんとも。なにがあろうとしませんとも！

たとえ、普通にいつものように田が覚めて下に下りたら知らない人たちがいたり、その人たちが今まで見たことないほどの美形の持ち主だったとしても、そこにいた人たちとも当たり前かのように楽しく談笑している両親がいたとしても、自分が人間ではなく、天界の住人であるのほんとした父が天界の王で天帝だつて言われたとしても、そしていつの間にか家が消えて気付けば知らない場所にいたとしても！！

そしてそこが、魔法やら妖精やら神やら普通に生活している場所だつたとしても！

動搖なんて、するもんですかあああああつあああツあ！！！

はあはあはあはあゲホゲホゲホ…………もうヤダ（泣）

「」との始まりはそう数日前。

私、橘 蓮華は朝いつものように起きているものように朝ご飯を食べるため下に行くとそこには今まで見たことがないほどの美麗で美形で綺麗な男がいました…。

「…………だれ？」

今までこの常にのほほ～んとした人の娘として生きたきたがこんな美麗で美形で綺麗で……つまりは果てしないほどのイケメン2人なんて会つたこともなければ聞いたこともない。

その一人は降りてきた私に気付くと、サッと立ち上がり入り口の前で固まつている私の前まで来ると片膝を立てて頭を垂れたのだ…！それはもうひどいお国さまの騎士の如く…！

「はっ…？」

「お会いしたかつたです！姫様…！」

ぎょっとして下がる私にお構いなくその美麗で美つ…（以下省略）ナイケメンは何がどうなつているのかが今だ理解できない（当たり前だ）私に頭を下げたまま言いやがった…！

しかも姫だと…？本物の騎士かつ…！…つてそうじゃない…と思わず突つ込こんでしまつたじやないか…！

姫…？は…？私が…？いやいや、ありえないありえない…！

勘違いだそ�だこの人達はきっと間違つてここにいるんだそ�にちがいない！！

とこ「か」の騎士は何だ？誰だ？ビリの御伽噺から出てきた！？

私の頭の中は今パニックついているためちょっとおかしな方向に走つていきそうになつてゐるがそれほどのパニックしていることをわかつてほしい。といふが私は誰にいつてゐるんだ？

動搖した頭で誰かヘルプ！！と部屋を見回す私に両親の姿が映つた。だが、しつかーし！！その両親は私を助けるや、ぶりもみせずにのほほんと笑いながら私の方を見てたのだ！！

おい！あんた達の客だろ？！だつたら責任もつてこの状態をなんとかしろ！といふか説明しろ！

と思わず怒鳴つた私に責任はない。断じてない！！

目の前の御伽噺から出てきた勘違い騎士（仮）は怒鳴つた私にビックリして、いたようだがそんなの無視だ無視！原因はお前達なんだからな！！

「ほほーへえー」

あの後すぐになんとか両親の言葉で頭を上げて入り口をあけてくれた一人から脱兎の如く逃げ出した私は両親の説明にもう感心というか呆れというかもうこんな言葉しか出てこなかつた。

えー、よひやくするどだ…。

この田の前にいるのほほーんとした父は天界という田く神の世界？みたいな場所の王族の生まれで、大人になつて『天帝』という最高権力者になつたが母と出会い一緒になつて私が生まれてから、王族の柵みや娘と妻となかなか一緒にいれない事が嫌（こつちが本音だと私は思う主に母の部分で）で弟に押し付けてこつちに来た。それでずつと今まで見つからぬようにしていたが、昨日ついに見つかって自分が未だに『天帝』であることをしつて兄大好きだという弟が帰つてきてほしいとすがり付いてきたから帰ることにしたから娘である私も一緒に来てほしい…と。

「うん。だから帰るから。」

おほほほ。懐かしいわねえ。みんな元気かしら？とのほほーんと笑つている母にああ楽しみだねえ。

と笑う父にブチッと私の中で何がが切れた。

「ふ…」

ふざけるなああああああああ…！！

何が懐かしいわね。楽しみだよ…？

私は全然懐かしくもなければ楽しみでもないわあ…！！
行くなら一人でいったらいいじゃん！なんで私まで…？

しかも父の口ぶりからして私も強制的に行くことになつてゐるしきい
いいい！！

「じゃあ、行くつか

「ええ。やうね。」

と私が内心で叫びまくつてゐるのにあれよあれよとこう聞にこつて
間にかあの騎士達に囲まれて…
そして、気付けば見たことのないお城がありました。ちゃんとちゃんと
つて終われるか～！！

数日前の出来事（後書き）

初の一人称。……………楽しいつ！！（笑）

ベルサイユ宮殿！？

私がパニックつっている間に着いて浮遊感があり気付いた時に初めて
みた光景は城… というか宮殿でした…。

な、な、な、なによこれは～！？！？！？

「……はね、天界の宮殿、名前を天界宮というだよ」

私の内心の叫びが届いたのか父さんが苦笑気味に答えてくれた。

「はつー？宮殿ですとー？」

宮殿……ベルサイユ宮殿か！？

はい、いやまるでそれは作り物の話であって実際そんなものかある訳が…

そう思つたがはつとす。

！？ そうだ。そのありえないような話が今現実に起きてるじゃんかよー

「うん。 そうだよ。 今日から私達の家になる」

ちよ、ちよ、ちよつと待て――――――

思わず頭をかかえしゃがみ込んだ私達の少し離れたところの後ろにいた一人の騎士（仮）が慌てて走った。

「姫様！？どうかなさいましたか！？」

「ど二か怪我でもしたのか！？」

慌てている一人には悪いけど今はそんな事よりも目の前の現実が信じられずに呆然としていた。

ありえない、ありえないわ。昔から両親は色んなところでありえない人たちだとは思っていた……けど――まさかこんな……ありえない。

あー、これがよくにいう現実逃避ついでやつか。ああ……。これはしたくもなるわああああ――

ちらりと田の前を見ると私の現実逃避などお構いなくそこには相変わらずの富殿が存在していた。

本当にありえないからあああああ――！？

……もうやだ泣きたい……（泣

「大丈夫ですか？」

そして横にいる一人の騎士（仮）の存在もありえないわ……。

でも「のまま」で「る」わけにはいかないよなあ…

はあつとため息をつくと心配そうに「してこる」一人になんとか声をかけた。

「…大丈夫。ちょっと混乱してるだけだから…」

ホツツと安心した顔をする一人に私は僅かに笑う。もうそしゃあ顔が引きつっているだらうけどね…！

「よかつた…。姫になにかあれば我々は生きていけませんから」

なつ！…何「」の殺し文句は！？…というか生きていけないっていまどきそんな呪詞を吐くやつなんか世界中探してもいなって…！

とこりかそこまで言わす私つて…何者だよ…（汗

「じゃあ行こうか？」

そうこうして「」と笑う父さんに少し殺意が沸いた！

いやいや、落ち着け落ち着け私…！

この人が「」なのはこつものことじゃないか！

ふーと深呼吸をして立ち上がる私に紅い髪の騎士が手を貸してくれた。

おお、紳士だ。

「どうだ？」

「シ、と笑つ彼の紳士心に思わず感動した。こんな男いるんだなあ
つと（笑）

「…ありがと」

「どういたしまして」

手を話して田の前の宮殿を見ていると田の端でスッと先ほどの彼とは別の騎士が私達を先導するよつに前に出て私たちを振り返つた。

「「」森内しまあ。」」

そつ言つと頷く父と母、そして私を先導して歩きだした。

私はその姿を見ながら諦めのため息を吐いて足を進めた。

ちなみに紅い髪の騎士は私達の一番後ろから着いてきていた。

王族を正面から見てはならない。

つづき。

しばらく歩いていると見えたきた入り口へしきもの。

…なんかどんどんちかくなってきてる入り口はここより門なんですかどつ！？

そして歩いてようやく着いた目の前には扉でした・・・。

そう扉…それもかなり巨大な。目の前にそびえたつ扉は普通の扉よりもざつと10倍、20倍いや、もっとあるかもしないほどの巨大な、そう曰つて大！…なものだつた！…

扉の一番上を見上げようとするが全然見えないよ…！
逆に無理してみようものなら首を痛めそうなほどの大さだつ…！
いや痛くなるからしないけどさつ…！

これを見た瞬間私は決意した！もう何を見ても驚くまいと…！

「開門…！」

銀色の髪の騎士（仮）が言つと扉がギギギギギギギギギギギギとゅつくりと開いた。

扉を開くとそこから見えた先には扉から数m離れた場所にある丸い

噴水。

門から足を進めるとちゃんと人が通れるように地面にレンガのよつたな物が埋め込まれておりそこを通つて人が歩けるようにしているみたいだ。

私のイメージとしたら金持ちの庭みたいなイメージだったが、その先にある馬小屋らしき小屋やその近くにある柵、そしてその柵の向こう側は草原みたいな草があつてそこに馬が数頭いた。

その馬に乗つていうる人も数人いた。

ちがう！なにかちがう！さすがに金持ちでも馬がいたり、こんな草原があつたりするものか！？

いや私の中のイメージではここまでないわあああああ！！

そしてありえない事にその人たちは腰に剣を刺しているじゃないか
つ！！さらにありえないわ！！
ここは戦国時代か！？

あ、でも…ちらしと先導している銀髪の騎士や後ろにいる騎士を見たが彼らは腰に剣は指していない。

……なんてた？明らかに彼らの方が偉そうに感じするのに劍をさしていいない……？

疑問は色々あるが今は着いていくしかないためそのまま歩くと、馬小屋みたいな場所を通るのか歩いていると私達に気づいた馬のそばにいた人たちははつとした顔をして、敬礼をした。

はっ！？やつぱりこの騎士（仮）の人たちの方が偉いの！？
つてかその人たち私達をみて驚いた顔をしてすごい凝視しているん
だけどつ！？

なにー？

それに気づいた騎士（仮）にじろりと見られて慌てて田線をそらした！！

はあつとため息を内心着いている私にかまわざりんと進んで彼らの前から通り過ぎるが、後ろから視線を感じる。ああ…見られてるなあ。

「…申し訳ありません」

銀髪の騎士（仮）は私達に頭を下げると突然謝つてきた。
？？？なにを謝つているんだろう？

「かまわないよ」

両親は苦笑して笑うが彼らは納得いかないようだ。

「いいえ。たとえお許しくださいましても王族をぶしつけに見るなんて許されません。それがあの者たちは…。本当に申し訳ありません。後できちんと教育しなおしておきます。」

「あいつら…」

「目が…なんか目が怖いよー！」

しかも後ろの方で聞こえてきた声も言葉少ない分怒りが声に出ててさらに怖いー！

…………黙つておひづ。なんか怖いから。

父さんと母さんはそれに苦笑をいほしてなにも言わなかつた。

そのまま黙つたまま宮殿の中に入つてある部屋の前まで來た。

叔父さん

ある部屋で足を止めると田の前の銀髪騎士（仮）は部屋をノックした。

コンコンコン。

「…入れ」

ノックの後少ししてから部屋から声が聞こえた。

「失礼いたします」

ガチャつと銀髪騎士…は声をかけてゆっくりと扉を開く。

「翡翠様。葵様、蓮華様をお連れしました。」

そう声をかけると銀髪騎士はドアの端によつて頭を下げた。

「ああ。」^{（）}苦勞様

その声に田を一人から中に田をやると、そこには一人の男性がいた。きっとこの人が父さんの弟といつ紫苑さんだろう。田元が父に似ている。

父さんと母さんが先に入り私が後から入ると後ろの方で戸がガチャとしめる音がした。

たぶん、騎士の一人の内どちらかが閉めたのだね。

「久しぶりだね。元気そつでよかつたよ紫苑」

「はい。兄上も」健勝でなによりです」

その声に見ると父さんが紫苑さんと楽しそうに話していた。
紫苑さんもそれはもう本当に嬉しそうにしている。

「葵さまも」健勝で…」

「ええ。ありがと。あなたも」

母さんにもにこやかに話す紫苑さん。
それに母さんもにこにこと話をしている。

紫苑さんはそれから数歩後ろに下がると父さんに頭を下げた。

何事!?

「よく、よくお戻りくださいました!」

それに父さんは苦笑をこぼした。

「君が探していたんだね!」

「はい。…兄上が「天帝」です。私は貴方以外天帝なんてありえない。そうずつと思つて参りました。
だからこそ私はずっと兄上の帰りを待つて、探していたのです!…」

「紫苑、私は君にすべて譲るつもりでこいを出たのだよ?」

「私はそんなつもりはありません……！」

「紫苑……」

「駄目です！兄上が天帝です！私では力も器量も政もすべて貴方に
はある。兄上でなければ駄目なのです……」

「……仕方ないなあ」

父さんは苦笑を零して諦めたようにいった。

紫苑さんはそれにホッとしたように安心したように顔を緩めた。

「おかえりなさい、兄上。いえ天帝……」

「ああ。ただいま紫苑」

そして紫苑さんは私を見た。

え…。そしてゆっくりと私に近づいてきて微笑んだ。

「君が蓮華？」

私が頷くと紫苑さんは本当に嬉しそうに笑った。

あ…。やつぱり似てるな…。ぱつと見ても似てるって思つたけど笑
つた顔が父さんに本当に似ていた。

それにはあの父の弟なだけあつてかなりの美形だし…。

でもあの一人の騎士（仮）もかなりの美形だし…………なん

だ。この世界。

美形しかいなかないのかあ！！

いや、女としては美形は好きだよ！？癒しにもなるし！！
あ、でも外にいた人達はちがつたし…………この人たちだけが特別な
のかつ！？そうなかつ！？なんちゅう羨ましいんだ！！

「蓮華？」

はつーまことにまことに思わずトロッپしてた。

「……いえ。なんでもあつません。あの……貴方が私のその……叔父さん
……ですか？」

そういうことくそつに言つ私に翡翠さんはこつこつと嬉しそうに笑つ
て頷いた。

「そうだよ。私が君の叔父だ。蓮華は覚えていないだらうけど、私
は君も赤ん坊の頃をしつているよ。…大きくなつたね蓮華」

「……叔父さん？」

そういうつて私の頭を優しく撫でる紫苑…叔父さんになんだか照れく
さくなつた。

「いれからよむじへね？」

「はーー。」

昔から私には親戚はいなって教えていたからこんな風に叔父さんがいてやさしくしてくれるのなんて考えてなかつたから正直照れくさいけど、嬉しい。

たとえこんなあつえない世界だと思つていてもこれは本当にうれしかつた。

名前を呼んで

あれから妖精や神様がこの世界に普通の存在していたり、神力とう世界を守り安定させる力が父や私にあるとか言われたけど、今までそんな力使ったことないしそんなに意識していない。
だけど力はちゃんとあつたようで数日立つて今まで見えなかつたものが見えるようになり、今では妖精の姿はばつちり見えるようになつた。

ここに来たときはそんなの全然見なかつたのに…。

そして今日も何をする訳でなく部屋にいても暇だつたため屋敷を案内された時に見つけたこの大きな木の下でのんびりと寝転がつているのだ。

この世界には神様がいるらしいけど、富殿から外に出たことがないためかこの富殿の人以外会つたことはない。
でも妖精は自然があらばどこでもいるらしくこうこう木や花、自然のいる場所には得に姿を見かける。
彼らは私に友好的だ。私が道に迷つたら案内してくれる。たまに悪戯をして困らせてくることもあるが本当に嫌だと思う事はしてこない。私と遊びたいだけらしい。

「ふあ～…」

ポカポカした日差しに穏やかな風が私の髪を撫でていき眠気が生まれ思わず欠伸がてくる。

眠い…。ちょっとだけ寝ていいよね…。

私はおそれてぐる黙気で逆らわざにそのままひつじだら黙る事にした。

…。
そもそも寝やすい姿勢を見つけるとそのまま寝が重くなつてきて

Z Z Z Z Z Z

— 16. —

どこからか声が聞こえる…。

۱۰۰

一姫さま！

その声にボーとしながら田が覚めた私が見たのは私のすぐそばに田で、膝をたてて覗き込んでいるのは薄い緑の短髪と瞳の綺麗な顔の男性。起きたてで寝ぼけている私は思考が追いつかないでいた。

「おはようございます」

はつとして田が覚めた私はガバッと体を起こした。

「えー？ あ……？………… 優翠？」

「はい。お休みでしたらお部屋でお休みください。お風邪をお引きになります」

「あー……」

空を見上げると空が赤くなつていてだいぶ長い時間寝てしまつていたようだ。

冷たい風が吹きブルツッと体を震わせ腕をこすりあわせるとふわっと肩から何かをかけられた。

「え？」

振り返ると自分が着ていた服を一枚私の肩にかけてくれている優翠の姿があった。

「あ……ありがとうございます」

そんな事今まで誰にもしてもらつた事すらない私はちょっと恥ずか

しくなつた。

「いいえ。 もどりましょ、う~」

「…うん」

照れる…ものす」に照れるけど、このままいにいても寒いしだけ
だしそうぞう戻らないと心配しているだらうから戻る事にした。

私が歩きだすと私の2歩ほど離れたところから歩いてくる優翠。

優翠もあの私たちを案内してきた一人と同じく騎士だ。 ちなみにあ
の一人の名前は銀髪の人が雷希、紅髪の人が紅炎といつらしい。
優翠は優しい雰囲気を醸し出しているいてその雰囲気通り優しい顔
しか私は見たことない。

でも、こういう人ほど怒つたら怖そなんだよなあ…。

それにこんな優しい人もある人達と同じように戦つたり兵士の訓練
とかするらしいから強いんだろうなあ…。

そんな事をちらりと後ろを見ながら思つていたら、バチッと目があ
つてしまつた。

「どうかしましたか?」

ドキ

「え、いや、あの…あー…そういえばなんで私の居場所わかったの?」

優翠ににこりとその綺麗な顔で話し掛けられて思わず心臓がドキド
キとなつてしまつ。

だつて私の周りの人達みんな美形なんだから女としては仕方がない！

私はどもりながらなんとか誤魔化そうとしてふと思ひだしたことを聞いた。

「ああ。それは…」

そういうつて優翠がスッと右手を上げるとそこには風の精靈達がふわふわ飛んできた。

「！」の子達が教えてくれたんですね

「…。とやうこつて笑つて夕日を背にする優翠や妖精達はまるで御伽噺の景色のよつだと純粋に綺麗だと思つた。

「…姫さま？」

ボーと見惚れていた私に声がかかりはつと我に返つた。

「あ、そつなんだ」

「どうかいたしましたか？」

「わづん。なんでもないよ

心配そづに話しかけてくる優翠は私が安心させむつに笑つとホッとした顔をした。

「ありがとう。優翠は風を扱うんだったもんね。」

「ええ。そうです。おかげで姫さまを見つけることができました。
… ありがとうございます」

そういうて風精霊たちを見ると風精霊達は嬉しそうに優翠の周りを
クルクルと飛んでわらっていた。

両親や私が持つてているという「神力」という力は私たちだけでなく
優翠達騎士にちゃんと備わつていてるらしく、それぞれその人と相性
のいい属性があるらしい。

優翠は「風」の属性を持っているらしく、風精霊と仲がいい。他の
精霊達とは仲が悪いという訳ではないが風精霊は特別いいらしい。
そして相性がいい精霊とは話ができる。他の精霊とは出来ないとい
うわけでもないが、効きとりにくくなつきりした言葉を交わせるの
は属性の精霊のみだといつ。

それは他の騎士も同じく、紅炎の属性は「炎」雷希の属性は「雷」
であつて紅炎は「火精霊」と相性がよく雷希は雷=光の「光精霊」
と相性がいいらしい。

だが、光を属性を持つ騎士もいるらしく雷希以外にも「光精霊」と
相性がいい騎士ももう一人いるらしい。私はまだあつたことないか
らどんな人かわからないけど…。

みんなに、私はどの精霊の話もちゃんと聞こえるし話す事もできる。
それは両親の力が強いからだと言ひ。

… それは色々助かってるからよかつたと思ひ。迷つた時とか、迷つ
た時とか、迷つた時とか…。

だつてこゝものすこゝ広いんだから迷うのは当たり前じ
やんか——！

「あ、そうだ！ 優翠！」

私が優翠を呼ぶと優翠はにこやかに返事をしてこちらを見た。

十一

「私のこと姫じやなくて蓮華つて名前で呼んでつて…！」

優翠は困つたように笑つた。

そう、ここの人たちの殆どが私を「姫」って呼ぶ。確かに父は天帝だし、母は王妃っていう立場の人だから「姫」なのは間違ってはない……けど！

「申し訳ありません。それは出来かねます」

ほら、いつまでも困った顔をして断つてくわ。

「申し訳ありません」

「なんで！？私は蓮華であつて「姫」つて名前じやないわ！」

せつこうして足を止めて頭を下げる優翠に私は何も言えなくなる。

名前を読んではしきけど、そんな事をしてほしいわけじゃないのに

…。

だけど、今日は引けない！ずっと言つてゐるんだからなんとしても姫だけは嫌！

でもどうした？…。

黙つて考へこんでしまつた私に優翠は困つたよつた顔をしてくる。

「あ？ なにしてんだ二人とも？」

その時宮殿の中の中途半端な場所で足を止めていた私たちの前にこちらに向いて走ってきていた紅炎は不思議そつた顔をした。

「あ、紅炎」

私は名前を呼んでくれている紅炎ならもしかした優翠を説得してくれるんじやないかと希望を持つて紅炎に説明をすることにした。

「あのね…。」

説明すると紅炎はほほーと頷くとニシと笑つた。

「だつたら俺からいい案があるぜ？」

「へー？ どんなつー？」

その言葉に一体どんな案があるのか知りたくて聞き返すと紅炎は優翠に向き直つた。

「優翠。お前名前呼びたくなえの？」

「うーーちがいますーー。」

優翠は紅炎の言葉に慌てていつ。

「じゃあ、姫にせんな口は利けないって？…その姫がそれを望んでいるのにか？」

優翠はそれに「うーー」と口をもつた。

「ですが…」

「じゃあ、じうじたらいい。蓮華は名前を読んでほしい。けど優翠は姫を呼び捨てなんて許されないと思つてゐ。……だったら「蓮華様」って呼べばちゃんと敬称ついてるし、名前は入つてゐ。これならお前も呼べるんじやねえか？」

なるほどーー。それなら姫よつまといいかも。

……様つけられてるのは気になるけど、まだ姫よつかはいい…。

「…」

眉を寄せて深く考え込んでいる優翠を見る私に紅炎はニッと笑う。

「な？これならいいだろ？あ、俺は蓮華つて呼ぶぜ？」

「うんー。」

そして優翠を見るとフワッと笑うと私を見た。

「わかりました。ではこれからは蓮華様と呼ばせてもらいます」

「あ。うんーー！ありがとうーー！」

それに嬉しくなって満面の笑みで私は優翠に笑みで返した。
それを見た優翠と紅炎は目を細めて優しく笑った。

こつして優翠に名前を呼んでもうことに成功した私は優翠と紅炎
と一緒に部屋に案内されたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3556s/>

天界の姫君様

2011年4月16日00時07分発行